

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：13901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580094

研究課題名(和文) 会話分析を用いた「からかい」の分析 - 日本語会話教材の開発に向けて -

研究課題名(英文) Conversation Analysis of "teasing": Aiming at the Development of Japanese Conversation Learning Materials

研究代表者

初鹿野 阿れ (Hajikano, Are)

名古屋大学・国際機構・准教授

研究者番号：80406363

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、談話における「からかい」の連鎖構造と「からかい」が起こる連鎖環境を明らかにし、それを日本語教育のための会話教材開発に結びつけることである。本研究では特に、先行する発話において話を展開するやり方にある逸脱を対象とした「からかい」を分析対象とした。「からかい」は先行発話の逸脱を指摘しつつも笑い等で、その指摘が真面目なものではないことを示すことで行われていた。そして、参加者全員により相互行為的に達成されていることがわかった。また、本研究での「からかい」は、からかう者が何らかの理由説明/弁明が生じうる連鎖上の位置で起こっていることが分かった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to analyze the sequence structure of "teasing" and the sequential environment where "teasing" occurs in everyday conversation, aiming at applying the findings to the development of Japanese conversation learning materials. In this research, we focused, in particular, on the "teasing" targeting the previous speaker's deviations in the development of stories. It is revealed from the study that teaser points out the deviation of the preceding utterance with laughter that shows the teaser's unseriousness. It also turns out that "teasing" is interactionally achieved by all the participants. In addition, it is found that the "teasing" in this study occurs in the sequential position where some explanation/excuse for the absence of the recipient's reaction becomes relevant.

研究分野：日本語教育

キーワード：からかい からかいへの反応 会話分析

1. 研究開始当初の背景

親しい者同士の雑談では、相手をからかう、「からかい」を誘発するといった発話がしばしば観察される。「からかい」とそれに対する反応を適切に行うことは、親密な関係にあることの認識を、やり取りを通して示すことであり、そのやり方を知ることは、非母語話者が日本語での雑談に、親しい仲間として参加できるようになるために重要であろう。しかし、この点について、日本語教育の分野で論じられることはこれまでほとんどなかった。そこで、日本語教育における会話教育教材の開発へ応用する道を探るため、「からかい」を会話分析の手法を用いて「からかい」の連鎖構造を分析した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語母語話者、非母語話者の雑談における、相互行為としての「からかい」の連鎖構造と「からかい」が起こる連鎖環境を明らかにし、それを日本語教育のための会話教材開発に結びつけることである。そのために、日本語母語話者、非母語話者の雑談に現れる「からかい」発話を以下の観点から分析した。

- ▶ 「からかい」はどのような連鎖構造をもっているか
- ▶ どのような行為・状況が「からかい」の対象(ターゲット)となるか
- ▶ 「からかい」はどのようなやり方で達成されるか
- ▶ 「からかい」の対象となった人物は、どのように反応するか
- ▶ 「からかい」はどのような連鎖環境で起きているか

その上で、得られた知見の会話教育への応用を検討した。

3. 研究の方法

データとして、親しい者3人で行う雑談をビデオおよびICレコーダーで録画・録音し、それを詳細に文字化した(文字化は、西阪(2008)による)。そのデータ中に現れた「からかい」として観察可能な現象を抽出し、「からかい」の対象(ターゲット)となる行為・状況を「会話分析(Conversation Analysis)」の手法(Schegloff 2007 等)を用いて分析した。

「からかい」についての先行研究(Keltner 他 2001、Drew 1987)に基づき、「からかい」を先行する相手の発話に関連した何らかの逸脱について言及する行為であり、相手に対する攻撃的な要素(挑発性)とそれが本気ではないことを示す要素(遊戯性)を持つ発話とする。本研究では特に、発話者自らがターゲットを選んで行う(相手に誘発されたものではない)「からかい」に焦点を当てた。

4. 研究成果

(1) 「からかい」の連鎖構造

「からかい」のターゲットには様々なものがありうる。収集したデータでは特に以下の3つが観察された。

- ① 先行発話で語られたことに何らかの逸脱があり、その逸脱をターゲットにしているように見えるもの
- ② 先行発話から想起された情報に何らかの逸脱があり、その逸脱をターゲットにしているように見えるもの
- ③ 先行する話の展開のやり方そのものに何らかの逸脱があり、その逸脱をターゲットにしているように見えるもの

本研究では、特に③に焦点を当て、その連鎖構造と、連鎖環境を分析した。(①、②については、初鹿野・岩田(印刷中)を参照のこと。)

次の事例は、親しい女性3人(大学院生、A: 相田、S: 鈴木、Y: 八木)の雑談である。

【事例1】

- 01 A: しんちゃんです:=
 02 S: =hu
 03 (.)
 04 A: 昔さ: ghn((喉の音)) hhh .HHH((鼻の音))
 05 (2.0)
 06 A: n'か(.)君が好きだっ th か h っ て
 07 ゆ h う h (.)h と ちよ h っ と h
 08 () he he he he he he he
 (中略)
 09 A: なんか お医者さん:.(.)で:,
 10 S: うん
 11 A: なんか(.) .hhh((鼻の吸気音))
 12 (0.2)
 13 A: 二人が:>あそこの<シルエット-
 14 (0.2) な感じで立ってて:
 15 S: うん
 16 A: でここから誰か、しんちゃんか: 誰
 17 かが見ている(うだよ) [ね
 18 S: [うん
 19 (1.8)
 20 S: gh [H((喉の音))
 21 A: []二人ともなんか<手を取り合っ
 22 た感じでさ: .hh 君が好きだとかつ
 23 て言っ と h る h の h
 24 S: hh hh .h
 25 A: でも それは:.(.)のちのち: オ
 26 チで:(.)僕は自身が好きだ h と h か
 27 h っ て h ゆ h う h
 28 S: H::
 29 A: ¥そうゆう会話だったってゆう¥ .hh
 30 ⇒Y: ぜ h ん ぜ h ん 笑われ [へん [は h な=
 31 S: [ahah [a .hhh
 32 A: [hahaha
 33 ⇒Y: =しや:: ありがとう [=無駄な(.)=
 34 S: [ahahaha
 35 ⇒Y: = [無駄な h [テ h プつ h か h っ て
 36 A: [. hhh [hh
 37 S: [[dhohohohoh

38 A : [hh hh hh hh
 39 S : [hhhhhhhhhh [hhh .hh hhhhh .hh
 40 Y : [.HH hahahahaha
 41 A : .h だ : 'やめようと思ったんだけど
 42 [: hhhhh
 43 S : [ahahaha
 44⇒Y : そうやな : [それちょっと : (.)今=
 45 S : [そうね :
 46 Y : =ゆう (.)こと [じゃなかった=
 47 A : [う : ん.
 48⇒Y : = [な ha ha ha ha ha ha [ha hh
 49 A : [じゃなかったね [普通に
 50 S : [() だね : hehehe [hehehe

まず、30、33、35 行目の「ぜ h ん ぜ h ん 笑われへんは h なしや : ありがとう=無駄な (.)無駄な h テ h プつ h か h って」は、「ありがとう」という感謝を表す形式が使われているが、実質的には感謝ではなく「全然笑えない話」を、しかも「無駄なテープ (時間) を使って」までしたこと感謝するという皮肉になっている。しかし、この皮肉が攻撃的なだけの真面目な皮肉でないことは、八木が笑いながら発話し、発話後も笑っている (40 行目) ことからわかる。また、からかわれた相田も、聞き手の鈴木も笑っていることからわかる (31、32、34、36、37、38、39 行目)。からかわれた相田は、笑いのあと「だ : 'やめようと思ったんだけど : 」(「だ : '」は「だから」と聞こえる) (41 行目) と、自分の話が八木が指摘したように「笑えない話」であったことに自分も既に気づいていたことを示す反応をすることで、弁明をしている。八木はさらに、44、46、48 行目で「そうやな : それちょっと : (.)今ゆう(.)ことじゃなかったな」と、相田に同意をしつつ、相田の行為をはっきりと否定する。しかし、この否定もにこやかな表情で言い、続けて笑うことで、真面目なものではなく、笑うべきこと、すなわち「からかい」として受け止めるべきものであることを示している。そして、鈴木も、ほぼ同時に同意を示しつつ笑うことで、八木の発話が「からかい」であることに適切に反応している (45、50 行目)。

この「からかい」のターゲットは、直前の相田の話の内容そのものではなく、本来面白い話として始められたはずの物語りが、オチまできてても全く面白くない話であったこと、全然笑えない話を無駄な時間を使って話した相田の振る舞いである。つまり、物語りを展開し、語っていくやり方における規範からの逸脱がターゲットとされている。

(2) 「からかい」の連鎖上の環境

次に、この「からかい」がやり取りの中でどのような位置に現れているかを考える。

相田は 01 行目で「しんちゃんでき : 」とアニメの話について何らかの物語りが語られることを予測させる発話を行っている。ここでいう物語りとは、会話の中で語られる経験

談や作り話で、前置き、山場、終結部といった連鎖構造を持つ (Jefferson 1978) ものを指す。しかし、この時点で、相田の表情には笑いが感じられ、さらに「昔さ : 」と時間を特定する語を発したあと、05 行目で笑いをこらえるような様子を見せている。これは、その物語りが笑える話として組み立てられることを予示している。面白い話として組み立てられる物語りの場合、一般に受け手は、山場で笑うことが期待される。つまり、語り手は聞き手が笑えるように山場に向けて話を組み立てなければならないという規範がある。しかし、相田は話の途中で何度も笑い出してしまい (04、06、07、08 行目)、山場の直前にも (23 行目)、また一番盛り上げなければいけない山場 (オチ) のところでも聞き手より先に笑ってしまっている (26、27 行目)。さらに、28 行目の鈴木 of 軽い笑いのあと、29 行目では「¥そうゆう会話だったってゆう ¥ .hh」と笑える話の終了を念押しするような発話を行っている。

一方、聞き手である鈴木は、相田が物語りを開始した直後に「hu」と一度吹き出しており (02 行目)、そのあとも話を聞きながらうなずき、「うん」と聞いていることを示す反応をしている (10、15、18 行目)。オチの直前とオチのあとでは、軽く笑っている (24、28 行目) が、笑える話の聞き手としては十分な反応であるとはいえない。また、もう 1 人の聞き手である八木は、相田が話しているのを見てはいるものの、ほとんど反応せず、オチのあとも全く笑っていない。つまり相田の笑える話は笑いというあるべき反応が不十分なまま失敗に終わろうとしている。八木の「からかい」が起こるのはその位置である。

やり取りにおいて話し手が行った行為に対して期待した反応がなかった場合、聞き手には反応がないことについての理由の説明が必要となる (Pomerantz 1984)。物語りにおいて、聞き手は、理解を示すうなずきや相づち、また笑い話の場合はオチで笑うという反応が期待される。事例 1 で八木の「からかい」が起こっているのは、物語りの聞き手として期待される反応が十分にはなかったことが明らかになった位置であり、そのことに対する八木の理由の説明として聞かれうる位置であるといえる。

以上をまとめると、「からかい」はそれまでの話の展開のやり方における逸脱がターゲットとされていた。その発話の組み立ては、相手に対する批判を笑いや笑顔などまじめな (真剣で直接的な) ものではないことを表しつつ行われていた。「からかい」の受け手も、それが「からかい」であることへの理解を笑いで示しつつ、相手の批判的要素に対して弁明や抵抗をしていた。つまり、「からかい」は参加者全員によって相互行為的に達成されていることがわかる。

さらに、「からかい」が起こった連鎖上の環境をみてみると、「からかい」は、ある行

為に対して期待される反応がないという現象が繰り返し起こったあとに観察された。その位置は、そこに配置される発話が、反応できなかった聞き手の理由説明／釈明と聞くことが可能となる位置である。理由の説明／釈明と聞ける位置に「からかい」のような(遊戯的要素を含みつつも)相手の逸脱性を指摘するという挑発的行為が現れることは示唆に富む。Drew (1987) が指摘するように「からかい」が親しさを表す指標となりうるのは、このような位置に現れうるからであるといえるかもしれない。

事例1は、物語りを語るやり方における逸脱が「からかい」のターゲットとなっていたが、その他、「誘い」のやり方における逸脱がターゲットとなった「からかい」の事例もあり、そのやり取りにおいても、同じような現象がみられた。

(3) 「からかい」への反応

次に、教材への応用を視野に入れ、特に「からかい」に対する反応に焦点を当てて、事例を検討した。「からかい」の反応には、笑いや同調だけではなく、笑いのない抵抗や抗議等の「まじめな (po-faced)」反応 (Drew 1987) がしばしば観察されることが指摘されている。

事例2は、親しい大学院生3人(女性、R:レイコ、A:アキコ、M:ミエ)の雑談である。レイコが食べたお菓子が、食べているうちに徐々に辛くなり、ついに大声を出すほどの辛さであることが分かったあとのやり取りである。

【事例2】

- 01 R: からい 唐辛子間違えてかんじゃっ
 02 たときの(.)辛さ.
 03 ⇒A: hh ¥間違えちゃってかんじゃうとき
 04 ある: ? ¥ hu hu
 05 →R: ペペロン [チーノとか
 06 M: [あ:あ:[わかるわかる
 07 A: [ああ::: : :
 08 hahahaha

01行目でレイコは何度目の「辛い」という言葉を口にし、その辛さを「唐辛子を間違えて噛んだときの辛さ」であると表現する。この発話にある逸脱性がレイコに対するアキコの「からかい」(03、04行目)の対象となる。つまり、唐辛子のような食べ物、気をつけて口に入れるべき物であり、「間違えて」噛むなど常識外れであるという逸脱の指摘である。アキコは笑いを含んだ声で発話し、かつ発話の前後で笑っており、明らかに真面目ではないことを示している。それにもかかわらず、レイコの反応は、笑いや肯定といった同調ではなく、真面目な答え(「からかい」への抵抗)として反応している。このような反応(真面目な否定や抵抗)はDrew (1987)等、多くの事例で分析されている。本データ

でも事例2のような笑いを伴わない反応がいくつか観察されたが、多くは笑いが前後(またはどちらか)に付加されるものであった。

「からかい」に対する反応としては、笑う、または笑いながら「そうそう」と言って同調する事例もみられた。さらに、次に示す事例3のように、ただ同調するのではなく、「からかい」として発話されている非現実的・非常識的な提案に乗って、自分で自分を笑うような反応も観察された。

【事例3】

- 01 A: い: : ってなる? え? (.) 辛い
 02 の食べたらどうなんの?
 03 (1.2)
 04 R: え どうなる: - どうなるってひどく
 05 なる. なん [か. 顔とか [> あたしく
 06 A: [h h h [h
 07 R: 炭酸飲むと k uu: : ってなるらしく
 08 って ((顔をゆがめる))
 09 (1.0)
 10 R: (° なんか [ね: °)
 11 ⇒ A: [じゃあそれ撮ってもらい
 12 ⇒ な h [よ [h: hhhahahaha
 13 → R: [h: [ha ha . hhhh こうやって
 14 M: [hhhhh
 15 → R: [カメラ目線 [で?
 16 A: [あ: ん [ahahaha . hhh

01行目で、アキコはレイコに辛いものを食べるとどうなるのか聞いている。レイコは自分は辛いものを食べると顔が「ひどく」なり、炭酸を飲むと同様に顔が「k uu: : ってなる」と言いながら、顔をくしゃっとゆがめる(05、07、08行目)。11行目のアキコの「からかい」は、レイコの大げさな表現や表情(「k uu: :」と長く引き延ばされた擬音語と、それを発話するときの炭酸を飲んだ反応としては大げさといえる顔のゆがみ)をターゲットにしている。さらに、この「からかい」は、若い女性の「ひどい」顔をわざわざ撮影してもらえという非常識な提案として行われている(かつ、既に録画されていることが周知である状況でのこの提案は現実とはそぐわない)。それに対してレイコは、笑い、「こうやってカメラ目線で?」と言いながら、上体をひねってビデオカメラの方を向く。そして、目を大きく見開いておどけた表情を作ることによって反応する。これは、「からかい」の非現実的な提案に沿った形で、しかも、わざとカメラに面白い顔がよく写るように実演することで、「からかい」の対象となった自分を笑いの対象として位置づけ直す行為であるといえよう。

(4) 会話教育への応用

学習者が「からかい」に参加できるようになるためには、このような「からかい」連鎖の多様性を知り、その都度、その場に合った反応を自ら選択できる力の育成が有効であ

ろう。例えば、からかわれた時の反応を学ぶ活動として、以下のようなものが考えられる。①データに現れた「からかい」の中から学習者の会話に起こりそうなやり取りを再現し、音声データやビデオを作成する。②学習者はそれを視聴し、登場人物のどのような行為が「からかい」になっており、その反応はどのようなものかを検討する、③自分ならどう反応するか考える、④「からかい」と反応に必要な表現を知る、⑤実際にやってみる。

この活動で重要なことは、画一的なモデル会話の「正しい」やり方を学ぶのではなく、学習者が自分なりのやり方を探るということである。このような学習活動は、学習者が母語や日本語での会話経験、既有知識等を活用し、適切だと思ふやり方を仲間と検討することで、自身の会話での振舞いを意識化するリソースとして位置付けられる。

(5) まとめ

本研究で明らかになった「からかい」の特徴は、やり取りの中に現れるものの一部でしかない。今後さらなる分析が必要であろう。また、今回の結果を踏まえた、具体的な教材開発が必要である。

<引用文献>

- ① Drew, Paul. (1987). Po-Faced Receipts of Teases. *Linguistics*, 25(1), 219-253.
- ② 初鹿野阿れ、岩田夏穂、(印刷中)、「からかい」連鎖の構造と相互行為における環境、柳町智治・岡田みさを(編著)『インタラクションと学習』第2章、ひつじ書房
- ③ Jefferson, Gail. (1978). Sequential Aspects of Story Telling in Conversation. In J. Schenkein (Ed.) *Studies in the organization of conversational interaction*. 219-248. NY: Academic Press.
- ④ Keltner, Dacher, Capps, Lisa, King, Ann M., Young, Randall C., & Heerey, Erin A. (2001). Just Teasing: A Conceptual Analysis and Empirical Review. *Psychological Bulletin*, 127(2), 229-248.
- ⑤ 西阪仰、串田秀也、熊谷智子(2008)。「特集「相互行為における言語使用：会話データを用いた研究」について」『社会言語科学』10(2), pp.13-15. 社会言語科学会
- ⑥ Pomerantz, Anita. (1984). Pursuing a response. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action*. 152-163. Cambridge: Cambridge University Press.
- ⑦ Schegloff, Emanuel A. (2007). *Sequence Organization in Interaction: Volume 1: A Primer in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 初鹿野阿れ、岩田夏穂、教材開発に向けた「褒め」と「からかい」への反応：会話分析の観点から、2016年日本語教育国際大会 proceeding、査読無、2016、http://bali-icjle2016.com/wp-content/uploads/gravity_forms/2-ec131d5d14e56b102d22ba31c4c20b9c/2016/08/are-hajikano_Teaching-materials-learning-resources.pdf
- ② 初鹿野阿れ、岩田夏穂、やり取りにおける問題解決に焦点を当てた会話教材開発の試み、ヨーロッパ日本語教育、査読無、20、2105, pp.189-194、http://84.200.52.25/pdfdownload/pdfdownload.php?index=204-209&filename=24_Happyo08_Hajikano.Iwata.pdf&p=19
- ③ 初鹿野阿れ、岩田夏穂、話の展開のやり方をターゲットとした「からかい」の分析、社会言語科学第34回大会発表論文集、査読無、2015、pp.34-37

[学会発表] (計4件)

- ① 初鹿野阿れ、岩田夏穂、教材開発に向けた「褒め」と「からかい」への反応：会話分析の観点から、2016日本語教育国際大会、2016年9月10日、Bali Nusa Dua Convention Center、インドネシア
- ② 岩田夏穂、会話分析のアプローチからみた会話の力とその実践—相互行為への参加と協働—、第二言語習得研究会(JASLA)、2016年12月17日、九州大学
- ③ 初鹿野阿れ、岩田夏穂、やり取りにおける問題解決に焦点を当てた会話教材開発の試み、第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム、2015年8月26日、ボルドーモンテニユ大学、フランス
- ④ 初鹿野阿れ、岩田夏穂、話の展開のやり方をターゲットとした「からかい」の分析、社会言語科学第34回大会、2014年9月13日、立命館アジア太平洋大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

初鹿野阿れ (HAJIKANO, Are)
名古屋大学・国際機構・特任准教授
研究者番号：80406363

(2) 研究分担者

岩田夏穂 (IWATA, Natsuho)
政策研究大学院大学・政策研究科・准教授
研究者番号：70536656